九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

目加田誠旧蔵一九三四年大学講義プリント：（四）馬廉篇

汪，洋
九州大学大学院人文科学府：修士課程

https://doi.org/10.15017/4363584

出版情報：中国文学論集. 49, pp.154-161, 2020-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

目加田誠旧蔵一九三四年大学講義プリント

――（四）馬廉篇

汪　洋

本資料は一九三四年一〇月に北京大学で実際に使用されていた講義プリントである。合計十九枚。版心上部に「中国小説史問題」と標題が記されている。内容は二十世紀初頭に敦煌から発見された「大目乾連冥間救母変文」の全文である。

プリントに署名が見えないが、この授業の講師はこの時の北京大学教授馬廉（一八九三～一九三五）。彼は、字は隅卿、浙江省鄞縣（現在の寧波市）の出身。近代における中国の通俗文学研究の先駆者の一人であり、一九二六年、上海に去った魯迅の後任として、北京大学で中国小説史を担当した。

ここに掲げられている「大目乾連冥間救母変文」は、イギリスの探検家オーレル・スタイン（一八六二～一九四三）が持ち帰ったものに含まれていた作品である。この講義資料の最終ページ末尾に次のような説明が記されている。□①～③は、活字が刻印されていない欠字部分である。

右目連救母變文全帙，即倫敦博物館所藏斯坦因在甘肅敦煌將去卷子中之S□①號。此從日本大正（ママ）□②年所印大藏經卷□③中錄出。

北平圖書館有麗字八十五號，霜字八十九號，成字九十六號，三殘卷可以對照。

プリントの欠字部分を補っておくと、①のスタイン番号は「S二六一四」。これは日本の仏教学者矢吹慶輝（一八

七九～一九三九）が英国に渡り、一九二二～二五年の間に大英博物館において写真撮影したものの中に含まれていたものである。[1] やがて②「昭和七年（一九三二）」に刊行された『大正新脩大蔵経』の、③「第八十五巻（古逸部・疑似部、大蔵経番号二八五八）」に翻字されたものが、この講義資料の原本である。また馬廉は、この講義に臨んで北平図書館に収蔵されていた目連変文の残巻「麗字八十五号、霜字八十九号、成字九十六号」三本も対照しながら読み進めたようである。ちなみにこの三巻は現在も中国国家図書館に所蔵されており、分類番号は順に「北京八四四五、北京八四四三、北京八四四四」である。[2]

敦煌文書は、一九〇〇年、道士の王円籙が莫高窟で偶然発見した三、四世紀から十一世紀初めまでの膨大な文献群である。一九〇七年に先述のスタインが、その翌年にはフランス極東学院のポール・ペリオ（一八七八～一九四五）が入手し、その存在が世界に知られるようになった。清朝政府も慌てて保全のために残巻を北京へ移送した。一九〇九年、京都帝国大学の内藤湖南、狩野直喜ら五名が調査のため北京に赴き、さらに狩野直喜は一九一二年よりイギリス、フランスへ外遊してこれらを閲覧し、筆録して持ち帰った。日本における本格的な敦煌文学の研究は、狩野直喜が発表した「支那俗文学史研究の材料」（『藝文』第七年一・三号、京都文学会、一九一六年一月・三月）に始まる。[3] これを受け、中国でも王国維「敦煌発見唐朝之通俗詩及通俗小説」（『東方雑誌』第十七巻八号、商務印書館、一九二〇年）が発表された。王は「孝子董永伝」「唐太宗入冥記」などを分析し、これらの作品を「通俗詩」および「通俗小説」と名付け、勧善懲悪の機能を持つと考え、特に後者を宋以降の通俗小説の原型であるとした。続いて魯迅も、一九二三年に『中国小説史略』を刊行し、これらの作品を俗文体で書かれた先例として紹介し、みずからの構想する中国小説史の一部に織り込んだ。[4] しかし小説の娯楽性を重視する魯迅は、王国維の説を踏まえつつも、これらの文学作品が通俗小説の直系の先祖ではないことを主張した。

やがてこれ以降、敦煌文学の研究は題目に「変文」や「押座文」とあるものが特に注目されるようになっていった。中国では、一九二四年に羅振玉が『敦煌零拾』を自費で翻刻したほか、日本でも一九二七年十月、弘文堂書房が刊行する『支那学』第四巻第三号に青木正児「敦煌遺書『目連縁起』『大目乾連冥間救母変文』及び『降魔変押座文』に就て」と倉石武四郎「『目連変文』紹介の後に」とが併せて収録され、新たな研究対象として「目連変文」が

注目を集めるようになった。[5] 特に青木正児は、狩野直喜の説を受けて、これらの「変文」が語り物文芸の先駆と呼べるか否かを究明しようとした。

馬廉がみずからの講義に「目連変文」を取り上げたのは、このような当時最新の研究動向に突き動かされたものであろう。[6] また、友人の鄭振鐸が一九三二年末から刊行した『挿図本中国文学史』（商務印書館）で、変文に一章を設け（第三十三章）、宋元以来の戯曲、話本、宝巻など通俗文芸の文体上の源流と位置づけたことに大いに影響を受けたかもしれない。

なお馬廉が講義に選んだ「大目乾連冥間救母変文」は、現在でも変文という文体の特徴を最もよく備えた作品とされる。[7] また、その際に『大正大蔵経』所載のスタイン本を底本として採用したことは、彼の選択眼の正しさと、彼が当時の日本の学術界の動向にとりわけ強い関心を懐いていたことが窺えよう。

しかし馬廉は、この翌年、授業中に脳溢血を発症して他界した。享年四十二歳。彼がこれより研究をすすめることは出来ず、講義も魯迅のように論述と批評に富むものではなかったことが惜しまれる。馬廉の主眼は明清短篇白話小説研究に在った。控えめな性格で、論文は考証に長けているが縦横な議論は好まなかった。没後、彼の旧蔵書は北京大学附属図書館に「不登大雅文庫」として収蔵され、今もなお戯曲小説研究資料として活用されている。[8] しかし現在では蔵書家としてのみ著名な馬廉について、[9] このたびの目加田誠旧蔵資料を通して、彼の研究者としての新たな一面を発見できたことは、後学の私たちにとってこの上ない喜びである。

注

（1）矢吹慶輝『鳴沙余韻：燉煌出土未伝古逸仏典開宝』（岩波書店、一九三〇年）、同氏『燉煌出土古写仏典について』（岩波書店、一九三二年）、同氏『鳴沙余韻解説』（岩波書店、一九三三年）参照。

（2）荒見泰史「中国国家図書館蔵『目連変文』写本五点」（『絵解き研究』第十七号、二〇〇三年）参照。

（3）のち狩野直喜『支那学文薮』（弘文堂書房、一九二七年）に収録。また、以下の日本における敦煌学の状況は神田喜

一郎『敦煌学五十年』（二玄社、一九六〇年）、金岡照光『敦煌の文学』（大蔵出版、一九七一年）、および高井龍「日本における初期敦煌通俗文学研究」（『敦煌写本研究年報』第十一号、京都大学人文科学研究所、二〇一七年）などを参照。

（4）今村与志雄訳『中国小説史略』第十二章（学習研究社、一九八六年）参照。

（5）ちなみに青木正児と倉石武四郎がここに紹介する目連変文は、東北大学の岡崎文夫がパリ遊学中にペリオのコレクションの中から筆写して持ち帰った本文である。

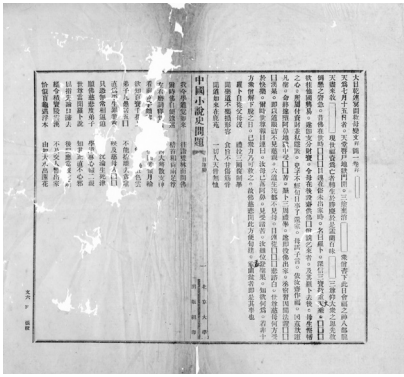
（6）馬裕藻「『今楽考証』跋」（『続修四庫全書』第一七五九冊、上海古籍出版社、二〇〇三年、七一五～七一七頁）参照。

（7）梅維恒著、楊継東・陳引馳訳『唐代変文』第二章（中国仏教文化出版、一九九九年）参照。また、小松謙・井口千雪ほか「大目乾連冥間救母変文訳注（一～四）」（『京都府立大学学術報告・人文』第七十号・第七十一号および京都府立大文学会『和漢語文研究』第十六号・第十七号、二〇一八～一九年）参照。

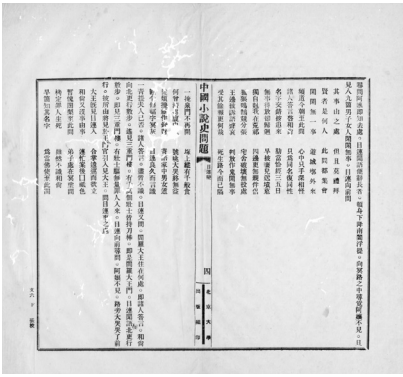
（8）潘建国「馬廉的蔵書及其小説研究」（『国学研究』第十七巻、北京大学出版社、二〇〇六年）、同「応該重新評価馬廉的学術史意義――『馬隅卿小説戯曲論集』読後」（『書品』第一期、中華書局、二〇〇七年）参照。

（9）黄霖、許建平『二十世紀中国文学研究史』第六章第一節（東方出版中心、二〇〇六年）は、馬廉を古小説の収集整理者として紹介し、陳平原『作為学科的文学史』第七章第三節（北京大学出版社、二〇一一年）は、馬廉が古小説の諸版本を影印したことについて、魯迅が評価していたとの事実を紹介している。

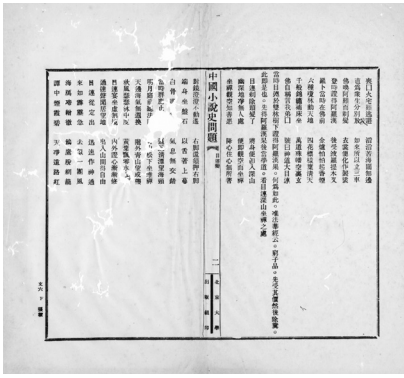
【付録】講義プリント全書影
（4）馬廉「中国小説史問題」



1

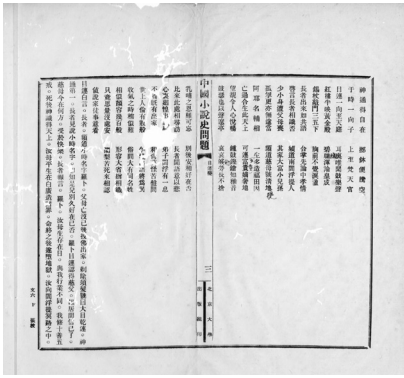


4

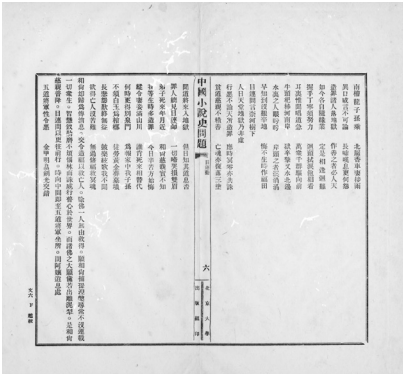


2

5

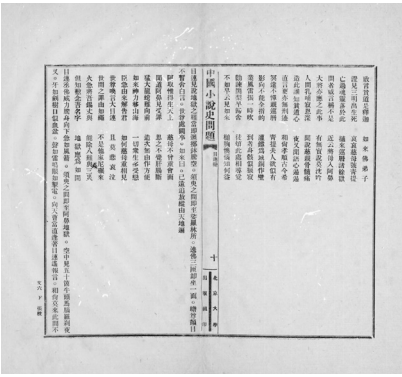


3

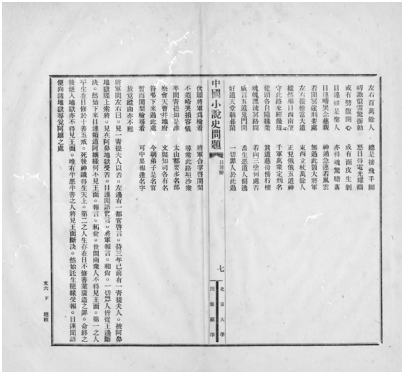


6

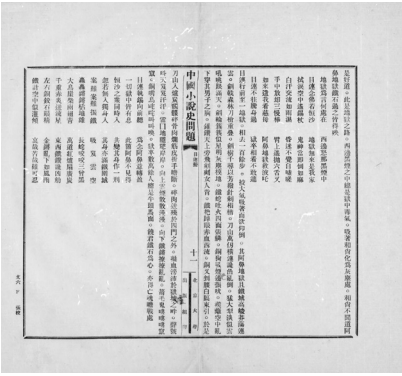
目加田誠旧蔵一九三四年大学講義プリント（四）馬廉篇



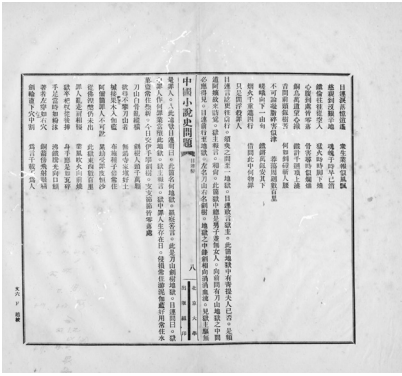
10



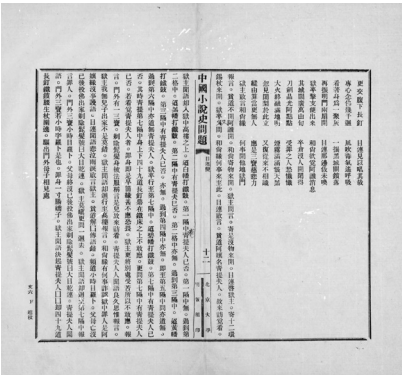
7



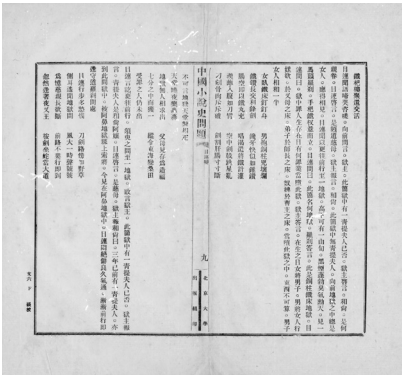
11



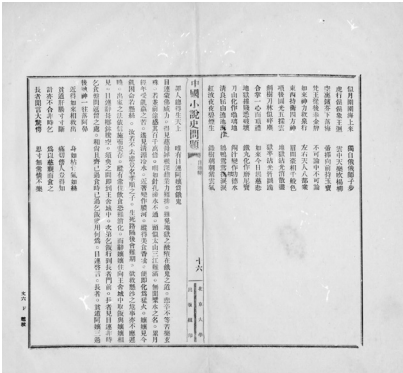
8



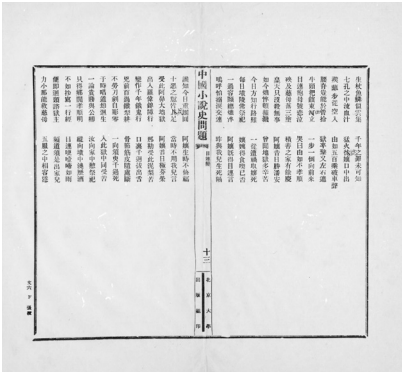
12



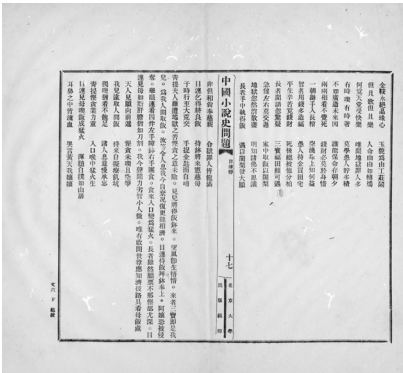
9



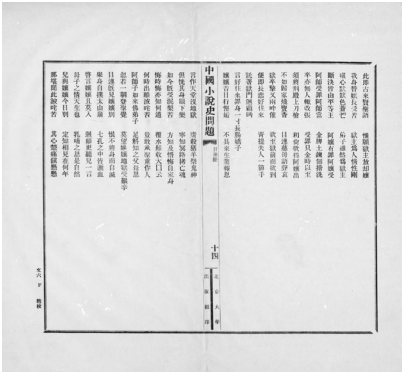
16



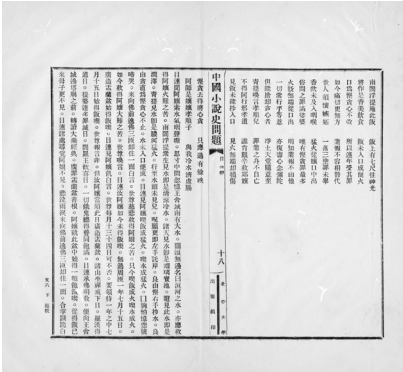
13



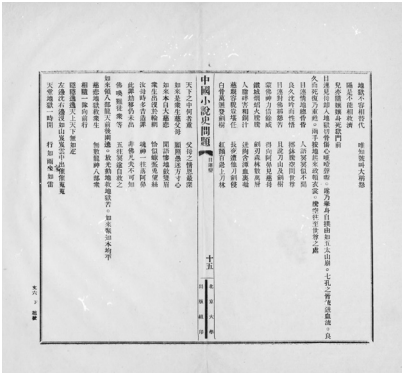
17



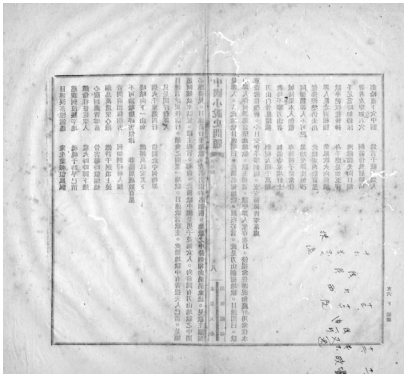
14



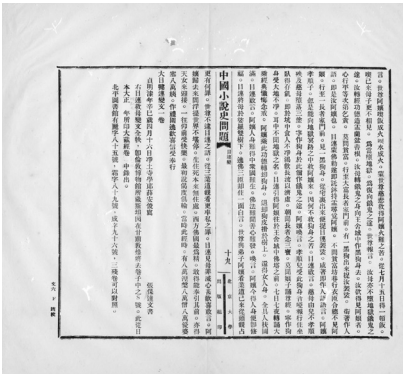
18



15



8裏



19